



Title	鎌倉中期における鎌倉真言派の僧侶：良瑜・光宝・実賢
Author(s)	平, 雅行
Citation	待兼山論叢. 史学篇. 2009, 43, p. 1-27
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/8509
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

鎌倉中期における鎌倉真言派の僧侶

——良瑜・光宝・実賢——

平 雅 行

はじめに

本稿は鎌倉幕府の宗教政策を説明する基礎作業として、鎌倉で活動した僧侶の事蹟を明らかにすることを目的とする。かつて中世仏教は民衆仏教と評されてきたが、顕密体制論は、こうした見解に学問的根拠が存在しないことを暴露してみせた。中世仏教の基軸はあくまで国家仏教であり、それが中世社会・中世民衆に圧倒的な影響を及ぼしている。

しかし中世における国家仏教は朝廷や幕府の宗教政策に大きく依存しており、中世仏教の実態を明らかにするには、国家の宗教政策を究明しなければならない。特に鎌倉幕府が成立すると、その政策は顕密仏教に多大な影響を及ぼしており、幕府政策の分析は中世仏教論にとって不可欠の課題といえるだろう。とはいえ、史料は限られており、その具体化は容易でない。そこで筆者は、鎌倉で活動した僧侶の経歴を、京都・鎌倉を含めて立体的に明らかにすることによって、その欠を補おうと考えた。そして北条氏出身僧六〇名、鎌倉山門派七五名、鎌倉寺門派一〇

五名の事蹟を洗い出す作業を進めた結果、鎌倉幕府の宗教政策の変化が浮かび上がってきた^①。その概要は次の通りである。

①源氏将軍時代は鶴岡八幡宮・勝長寿院・永福寺など将軍御願寺を中心に顕密仏教の整備を進め、将軍頼経時代には人的充実を図って将軍護持体制を整えた。

②宮騒動・宝治合戦によって将軍権力が北条得宗に敗れると、幕府は政策転換に踏み切った。鎌倉の顕密仏教界を縮減してそれを寺門派に主導させる一方、禅律僧を積極的に登用して京都への依存を低減させた。

③「神風」によるモンゴル撃退は顕密仏教の重要性を幕府に再認識させ、幕府は顕密仏教の全面的興行を図った。こうして鎌倉の顕密仏教は最盛期を迎える。

ただし、こうした見通しをより堅固なものにするには、鎌倉真言派の実態解明が欠かせない。しかし鎌倉で活動した東密僧は膨大に存しており、その全容解明は容易ではない。櫛田良洪氏などの先行研究が存するが、それらはなお概観に留まっ^②ていて十分とはいえない。そこで本稿では、鎌倉真言派を検討する手始めとして、鎌倉中期に鎌倉で活動した三名の僧侶の事蹟を検討したい。安祥寺流良瑜、三宝院流光宝、そして金剛王院流実賢である。わずか三名とはいえ、いずれも重要な役割を果たした人物である。鎌倉幕府の宗教政策研究のためには、こうした地道な作業が必要であると考ええる。

一 安祥寺流良瑜

鎌倉真言派は執権北条貞時・高時時代に最盛期を迎える。北条氏出身の頼助・政助・有功が鶴岡八幡宮別当と

なつて鎌倉仏教界に君臨しただけでなく、彼ら幕府僧が東寺長者・東大寺別当・醍醐寺座主に進出して京都の顕密仏教界を席捲した。その中心となつた頼助は良瑜から伝法灌頂をうけており、政助・有助も安祥寺流につらなつてゐる。鎌倉における安祥寺流の動向は、鎌倉真言派の展開を検討するうえで非常に重要であるが、中でもキーパーソンともいふべき人物が良瑜である。良瑜は安祥寺流を初めて鎌倉に伝えた僧侶である。しかも良瑜が鎌倉で活動した時代のうち、將軍頼経時代は東密の隆盛期であつたが、逆に執権時頼・時宗時代は東密の低迷期である。その発展と低迷の両期における鎌倉真言派の中核的人物が良瑜であり、彼はさらに最盛期への橋渡し役をつとめた。このように良瑜は、いろいろな点で鎌倉真言派の重要人物である。そこで本節では、安祥寺流良瑜の事蹟を検討し、彼の活動が鎌倉仏教界に果たした意義、およびそれが安祥寺流にとって、どのような意味をもっていたのかについて検討したい。

良瑜権僧正（一二〇四～一二六七）は九条兼実の孫にあたり、左大臣良輔の子である。母は正三位六条経家女。父の左大臣を公名とし、安祥寺僧正・円城寺僧正と号した。勧修寺道室は異腹の弟であり、従兄弟には関白九条道家や園城寺良尊・道慶がいる。父の良輔が八条院の猶子となつて女院領の一部を相続したこともあつて、良瑜も幼時に八条院の猶子となり安井宮僧正道尊の付弟となつた。師の道尊は以仁王の子であり、守覚法親王の灌頂弟子である。八条院は以仁王を猶子としており、以仁王の挙兵後は道尊たちを匿つたし、以仁王の娘に女院領を譲ろうとした。つまり九条良輔と以仁王はいずれも八条院から鍾愛された経緯があり、そうした縁を踏まえて良瑜は道尊の付弟となつた。^③

良瑜は承久二年（一二二〇）法眼に直叙され、承久四年に権大僧都、貞応二年（一二二三）に道尊から伝法灌頂

をうけた。色衆二〇口の盛儀である。ところが経緯は不明ながら、良瑜は道尊の付弟の地位を除かれ、道尊の安井門跡は法兄の親寛僧正が継ぐことになった。⁽⁴⁾そこで良瑜は安祥寺成嚴の弟子となり嘉禄元年（一二二五）に成嚴から重受した。

師の成嚴（一一六一―一二三九）は少輔得業宗彦の息で、頼真阿闍梨から安祥寺流を受け継いだ。安祥寺流は歴代九条家との関わりが深いが、成嚴もその例にもれない。天福二年（一二三四）に九条道家のために五壇法脇壇を勤仕したし、貞永二年（一二三三）には九条教実の病悩平癒の不空絹索護摩を修し、嘉禎元年（一二三五）には大勝金剛供や如意輪護摩を勤修した。嘉禎四年には凱旋上洛した將軍九条頼経の五壇法脇壇を六波羅邸でつとめたし、道家娘の病悩平癒の十壇法を修するなど、九条家の祈禱に積極的に携わっている。⁽⁵⁾こうした九条家との深いつながりもあって、成嚴は良瑜に安祥寺流を伝授することを承諾した。

安祥寺は九世紀中葉に仁明天皇女御藤原順子によって恵運を開基として京都山科に創建されており、貞観元年（八五九）には年分度者三名が認められている。深覚（九五五―一〇四三）の時から、勧修寺長吏が安祥寺座主を兼帯するようになり、深覚―信覚―嚴覚―寛信と相承されたが、嚴覚の弟子の宗意（一〇七四―一一四八）が安祥寺流を別立し安祥寺近くの上野の地に僧坊を建てた。宗意の弟子の実嚴は九条兼実の支援をうけて治承二年（一一七八）上野の地に大勝金剛院を創建した。これにより安祥寺流は法流と門跡の双方を備えるに至り、実嚴―頼真―成嚴と相承されている。

ところで、東寺杲宝が執筆した『血脈鈔・野』によれば、成嚴は良瑜に法流と門跡の双方を授けたが、良瑜が関東に居住したため、もう一人の弟子である寛海法印が「御留主儀」として上野坊に住したという。つまり、良瑜―

頼助―政助―時助―有助の鎌倉安祥寺流が門跡の正統であり、成嚴―寛海―兼恵―寛伊―成恵―光誉―隆雅の京都の安祥寺流は鎌倉幕府が滅亡するまで「佐々目門跡留主儀」に過ぎず、隆雅の代になってようやく後醍醐天皇の綸旨を得て、京都の安祥寺流が「自專管領」することができたという。^⑥同様に醍醐理性院についても呆宝は、頼助―親助―光助と相承された鎌倉理性院流が理性院門跡を相承し、宗遍―観高らの京都の理性院流は「代代為^⑦留主之儀」て理性院の院務を担った、と述べている。実際、観俊から頼助、頼助から親助への醍醐理性院讓状が存在することからすれば、京都の理性院流が「留主之儀」であつたのは事実であろう。^⑦

ただし安祥寺流についても同様のことがいえるかは定かでない。延応元年（一二三九）に成嚴が死没した時に、門弟上足であつた良瑜が門跡を相承して、寛海を留守居にした可能性は十分にある。ただし良瑜・頼助・政助・時助・有助は安祥寺流を伝法しているものの、理性院の場合のように上野坊の相承に関わる記事はうかがえず、京都の安祥寺流が「留主之儀」であつたかどうか判断するのは容易でない。ただし、それは別にして、鎌倉中後期における京都安祥寺流が逼迫した存在でないことだけは確かである。櫛田良洪氏は

京都の寛海・兼恵・寛伊・成恵・光誉・隆雅と数代は佐々目門跡留守儀を以て忍ばねばならなかつた。安祥寺流が始めて法流坊舎を自專管領したのは隆雅からで、従来京洛に在つた法流の中心が、鎌倉末期には完全に鎌倉に移つて、（中略）京洛に替つて関東が法流の中心となつて了まつた。

と述べ、あたかも安祥寺嫡流が鎌倉に移り京都安祥寺流が零落したかのように語っている。吉田通子氏もそれに同調しているが、これは実態とは異なる。そもそも安祥寺流は宗意から始まるとはいえ、安祥寺すら掌握できない弱

小門流である。良瑜は安祥寺流が迎えた初めての貴種であり、むしろ安祥寺流の本格的な発展はここから始まった。

たとえば安祥寺流歴代の極官は、宗意が権律師、実嚴も権律師、頼真是阿闍梨とまりである。成嚴は最終的には法印までのぼったが、七五歳までは権律師に過ぎない。ところがその後は、鎌倉安祥寺流の場合、良瑜（権僧正）、頼助（大僧正・東寺二長者）、政助（法印権大僧都）、時助（少僧都）、有助（大僧正・東寺一長者）と高位の僧侶に継承された。京都安祥寺流も寛海（法印権大僧都）、兼恵（権僧正）、寛伊（権僧正・東寺二長者）、成恵（大僧正・東寺一長者）、光譽（僧正・東寺一長者）、良伊（法印）、隆雅（権僧正・東寺三長者）と高位高官の僧侶が跡をついでいる。⁹⁾

さらに注意すべきは太元帥法阿闍梨の独占である。太元帥法は法琳寺常暁が中国から伝えたもので、九世紀中葉から明治維新までほぼ千年間、天皇護持のため毎年正月に勤仕された。それをつとめる太元阿闍梨は、当初は常暁門流の法琳寺住僧が相承したが、天仁元年（一一〇八）より東密諸流から登用されるようになった。安祥寺流で初めて法琳寺別当・太元阿闍梨となったのは、治承五年（一一八一）に補任された実嚴である。前任の太元阿闍梨勝遍の代に兵乱が相次いだため改補され、九条兼実の推挙によって実嚴が太元阿闍梨に就いた。実嚴は兼実の父藤原忠通の護持僧であったし、また兼実の護持祈禱を盛んにおこなった僧侶であって、兼実は「実嚴者、粗知其法器、弘法大師之流、無可出彼右之者歟」と賞讃している。¹⁰⁾とはいえ、実嚴の弟子の頼真是太元阿闍梨に就いておらず、実嚴が補任されたからといって安祥寺流が太元阿闍梨を独占できるようになったわけではない。醍醐寺理性院流をはじめとする東密諸流がそれを競望していた。ところが嘉禎二年（一二三六）成嚴が七六歳の高齢で法琳寺別当に補任されてからは鎌倉末に至るまで、成嚴―寛海―兼恵―寛伊―成恵―光譽―良伊の京都安祥寺流が太元阿

闍梨をほぼ独り占めしている。元応二年（一二三〇）から四年間だけ理性院信耀が太元阿闍梨をつとめているが、それを除けば鎌倉幕府の滅亡まで京都安祥寺流が百年近くにわたって太元阿闍梨を独占した。¹¹⁾

このように良瑜の受法後、安祥寺流は京都でも鎌倉でも大いに発展している。特に京都安祥寺流は東密の世界で飛躍的に存在感を増した。杲宝のいうように京都安祥寺流がたとえ「留主之儀」であつたとしても、それは上野坊の管領権の問題に過ぎない。東寺長者や僧正・大僧正に昇つたことからして、京都安祥寺流は鎌倉安祥寺流に勝るとも劣らない權威性を獲得している。正中元年（一二三四）九月、鎌倉安祥寺流有助が東寺三長者を辞すと、その後任に京都安祥寺流光譽が補された。翌年八月光譽は東寺一長者に任じられるが、十一月になると光譽に代わつて有助が一長者に補任されており、両者の動きが連動している。京都と鎌倉の安祥寺流は互いに協力しながら顕密仏教界での地位を向上させており、安祥寺流の嫡流が鎌倉に移つたのではない。鎌倉安祥寺流は京都安祥寺流の權威性を支える大きな柱であつた。鎌倉安祥寺流が滅亡し京都安祥寺流が自立した室町時代に、太元阿闍梨が理性院に奪われたのはその証左である。鎌倉の支えを失つた京都安祥寺流は、その地位を下げている。

さて、良瑜の公請始めは寛喜三年（一二三一）二月の不空羅索法である。¹²⁾これは藻壁門院（九条道家娘）が四条天皇を生んだ時の御産祈禱であり、九条家にとってきわめて重要な御産であつた。ところが良瑜はその後、定豪の弟子となつて翌年一〇月には鎌倉で不空羅索護摩を修している。¹³⁾定豪大僧正（一一五二―一二三八）は承久の乱の時の鶴岡八幡宮別当であり、幕府の勝利に貢献した功績によつて熊野三山検校・新熊野検校に補任され、さらに東大寺別当や東寺一長者に任じられた幕府僧の中心人物である。定豪はこのころ京都に滞在していた。寛喜元年十二月に新熊野社で弟子に伝法灌頂を授け、翌年八月には東大寺別当として拜堂を行い、寛喜三年二月には良瑜とともに

に四条天皇誕生祈禱に携わっており、さらに寛喜四年の後七日御修法を勤修してから鎌倉に戻っている¹⁴。定豪と良瑜はそのころ接触したのである。当時、定豪は東南院道快（右大臣近衛道経息）や定親（内大臣源通親息）を弟子にするなど、京都の顕密僧を積極的に鎌倉に迎えていた。九条道家の従兄弟という良瑜は、將軍護持に当たるべき好個の人材であった。それゆえに定豪は「付属」を約して良瑜を鎌倉に迎えた。一方、良瑜の立場からすれば、安祥寺流は実嚴の活躍によって声望を高めたとはいえ、新興の弱小門流に過ぎない。鎌倉に行つて將軍頼經の護持祈禱に尽くす方が、未来が開けると考えたのであろう。

鎌倉では貞永元年（一二三二）の天変祈禱で不空羅索護摩を勤修し、延応二年（一二四〇）正月の彗星祈禱では七壇北斗供の中壇をつとめ、同年六月には祈雨のため孔雀経法を修した。また嘉禎三年（一二三七）には、大慈寺丈六堂供養の無事を祈つて五壇法中壇を勤仕している¹⁵。天福二年（一二三四）竹御所の御産で関東で初めて如法愛染王法をつとめたし、延応元年五月の將軍頼經の病悩では御湯加持の如意輪護摩を修するなど、随心院嚴海・鶴岡別当定親・松殿法印良基らとともに定豪を補佐しながら幕府祈禱や將軍祈禱に従事した。なかでも注意すべきは、延応二年六月の祈雨祈禱である。この時はまず鶴岡八幡宮別当定親に祈禱を命じたが「効験」がないため、勝長寿院別当良信に替えた。しかし、なお験がないため永福寺別当行勇に交代させ、ついに止むなく良瑜に孔雀経法を修させている。当時の鎌倉仏教界は鶴岡八幡・勝長寿院・永福寺の三寺が別格的地位にあったが、良瑜はそれに次ぐ存在として幕府から評価されていたことが分かる¹⁷。

『明月記』天福二年九月六日条に「安祥寺法印逐電、在伊豆国、定豪僧正付属変改之由愁歎云々」とあり、定豪が付属の約束を違えたのに抗議して良瑜は伊豆に逐電している。詳しいことは分からないが、これは恐らく同年

七月の竹御所の産死と関わりがあるだろう。竹御所は源頼家の娘であり、源頼朝の血を引く最後の人物であった。そこで北条泰時は竹御所と將軍九条頼經とを結婚させ、二人の子どもに將軍職を継がせることによって、幕府の安泰を図ろうとした。そのため定豪を中心に一三壇の修法を行わせるなど、祈禱体制を整えて御産に臨んだ。ところが、竹御所と誕生した男子の双方ともに亡くなってしまい、泰時の構想は根底から崩壊した。定豪は責任をとって東大寺別当と東寺二長者を辞任している。⁽¹⁸⁾ 衝撃の大きさがわかるだろう。しかも『明月記』同年九月十一日条での親嚴の発言によれば「関東將軍家俄被^レ召^二嚴海法印^一」⁽¹⁹⁾「非^二日頃事^一者、無^レ断之由、申云々」とあり、將軍頼經から東寺一長者親嚴に対し、弟子の嚴海を急遽鎌倉に派遣するよう強く求めている。親嚴は大江広元の親族であり、幕府の支援のもと隨身院門跡の実質的な創始者となった人物である。將軍護持体制を再構築するため、將軍が率先して顕密僧の招聘に動いている。こうした混乱と定豪の地位の動揺のなかで、良瑜の将来も危うくなり、それ故に彼は抗議の意志を示したのである。その結末は不明であるが、事件から三年後には良瑜が五壇法中壇を勤修し、その間に権僧正にも昇任している。⁽¹⁹⁾ この昇任は將軍頼經の推挙であろう。詳細は不明ながら、それなりの折り合いが付けられたようである。

ここで良瑜の所職を検討しておく。『血脈類集記』良瑜の項に「鎌倉將軍家御持仏堂別当」とある。將軍家持仏堂は源頼朝の時代から設けられていて建久六年（一一九五）十月に新造され、さらに嘉禎二年（一二三六）三月に移建されて久遠寿量院と呼ぶようになった。ところが「久遠寿量院別当次第」によれば、別当職は成源一・定豪一・定親一・教雅一・能嚴と相承されていて良瑜の名がみえない。⁽²⁰⁾ 良瑜が將軍家持仏堂別当をつとめたのは嘉禎二年の移建以前のこととみてよい。つまり貞永元年（一二三二）に鎌倉に下向してから嘉禎二年の間に良瑜は持仏堂別当に任じ

られたといえる。一方、「永福寺別当次第」には

莊嚴房僧都行勇〈寺〉

安祥寺僧正良瑜〈醜〉

御室戸大僧正道慶〈寺〉

とある。行勇は『吾妻鏡』延応二年（一二四〇）六月九日条に「永福寺別当莊嚴房僧都」とみえ、翌年七月に七九歳の高齢で死没している²¹ので、良瑜の永福寺別当就任はこのころと考えられる。このように良瑜は鎌倉では將軍家持仏堂や永福寺の別当に任じられた。

ところが鎌倉での良瑜の記事は延応二年六月で途絶える。寛元四年（一二四六）三月に良瑜は、興福寺唯識会の無事興行を祈って京都本坊で不空絹索護摩を修し、宝治元年（一二四七）十一月から父良輔の旧八条邸で授法活動を行っていたので、良瑜は宮騒動以前に帰洛したことになる。彼の活動が鎌倉で再開されるのは一六年後の康元年（一二五六）であり、その後は継続的に鎌倉で活動している。延応二年六月より後に良瑜が永福寺別当に補任されているので、鎌倉の不在期間は一六年より短くなるものの、良瑜は帰洛による長い空白の後に再び幕府に出仕したことになる。もとより、京都と鎌倉を往還した顕密僧は数多く、こうした空白は決して珍しくはない。しかし良瑜は他の僧侶とは立場が異なる。彼は將軍頼経と同じ九条家の出身である。良瑜の鎌倉不在中に、九条頼経と北条得宗との抗争が激化し、宮騒動・宝治合戦をへて得宗が勝利を収め、頼経派の顕密僧が鎌倉を追放された。良瑜はなぜ鎌倉を離れ、また彼はなぜ鎌倉で活動を再開することができたのか。

その原因は道慶の存在にあるだろう。良瑜は九条頼経と北条得宗の緊張が激化する以前に鎌倉を離れている。この帰洛は、良瑜に代わって道慶が永福寺別当に補任されたことと関わっている。道慶は寺門派ではあるが、良瑜

と同じく九条家の一門であり、將軍頼經の伯父にあたる。血縁的には良瑜よりも道慶の方が頼經に近い。道慶は仁治二年後半から翌年初めごろの間に鎌倉に下向したが、寛元元年（一二四三）十二月には將軍御所に隣接する地に彼専用の壇所が新造されるなど、道慶は將軍護持の中心となつて活動した。²³良瑜の祈禱記事が消える一方、道慶の修法記事が激増している。永福寺別当の交替は、將軍護持の中心となるべき九条家出身僧が良瑜から道慶に交替したことを象徴的に示している。このように良瑜は道慶によってその立場を奪われ、將軍護持体制から疎外されたため帰洛した。逆にその結果、良瑜は鎌倉で活動を再開することができたし、安祥寺流が鎌倉に定着することもできたのである。

鎌倉との関係が復活するのは建長五年（一二五三）十二月のことである。この時、良瑜は元瑜の有職解文を放つて²⁴いる。元瑜は宏教の弟子であり、当時二人は鎌倉で活動していた。このうち元瑜権僧正（一二二八―一三一九）は鎌倉中後期に関東で活躍した人物であり、西院流の付法三九名、保寿院流の付法二九人と膨大な弟子を残している。一方、その師の宏教権律師（一一八四―一二五五）は祈禱活動こそあまり目立たないものの、西院流の付法四名、保寿院流の付法一八名を残した。宏教は寛元元年（一二四三）ごろに鎌倉に赴いているので、永福寺別当であつた良瑜とはこの頃からの知音ということになる。こうした好もあつて、宏教は良瑜に安祥寺の有職解文を朝廷に提出するよう要請した。鎌倉幕府法は幕府僧の自由昇進を禁じているので、良瑜への依頼は幕府の了解済みとみるべきだろう。前年の建長四年二月に將軍九条頼嗣が追放され、九条道家も死没して、九条家の脅威は取り除かれていた。有職解文の要請は良瑜に鎌倉復帰を促すメッセージでもあつた。

良瑜はやがて鎌倉に下向し、康元元年（一二五六）十二月に大門寺で伝法灌頂を行ったのを手始めに、文永四年

(一二六七) 七月に六四歳で亡くなるまで、連年精力的に活動している。文応元年(一二六〇) 六月には止雨のため一字金輪法を修して験を施したし、翌年には辛酉御祈の五大虚空藏法をつとめ、文永三年には如法尊星王法を勤仕している。將軍護持では文応元年八月、赤痢にかかった宗尊親王のため七座法を修したし、文永元年の惟康親王誕生祈禱では如法尊勝法を勤仕したほか、翌年九月の將軍室の御産でも験者の一人として活躍した²⁵⁾。

特に留意すべきは、この時期の鎌倉仏教界に占める良瑜の位置である。正嘉元年(一二五七) 八月、幕府は大慈寺修造供養の曼陀羅供大阿闍梨を誰に勤めさせるか、その人選を評議している。候補となったのは頼兼(寺門)、良瑜(東密)、隆弁(寺門)、良基(東密)、嚴恵(東密)、尊家(山門)の六名である。翌年六月の勝長寿院修造供養でも曼陀羅供大阿闍梨の候補となったのは、大慈寺曼陀羅供をつとめた頼兼を除く五名である²⁶⁾。つまりこの六名が幕府僧の宿老と位置づけられていた。また弘長元年(一二六一) 鶴岡大仁王会では一〇〇口の僧侶が請ぜられたが、一〇〇口のうち鶴岡・勝長寿院・永福寺・大慈寺の供僧が八三口であり、残りの一七口は「長福寺・安祥寺両僧正并左大臣法印嚴恵等宿老僧綱等」が人選して請定したという²⁷⁾。長福寺僧正隆弁と安祥寺僧正良恵らが特別扱いをされており、良瑜が鎌倉仏教界の中核的位置にあったことを示している。

鎌倉に復帰してからの所職は明王院別当である。『血脈類集記』によれば元瑜は弘長二年に良瑜から「明王院西御壇所」で安祥寺流を重受したが、『西院血脈』所引の「元瑜僧正自製行状記」によれば、この時の伝法印可は「僧正房〈良瑜〉」で授けられたと述べており、良瑜が明王院に住坊をもっていたことがわかる²⁸⁾。鎌倉の將軍御願寺は、源頼朝御願の鶴岡八幡宮・勝長寿院・永福寺、源実朝の大慈寺、そして九条頼経御願の明王院の五ヶ寺である。北条時頼・時宗の時代は寺門偏重の政策がとられ、東密が振るわなかった時期であるが、その中にあって良瑜は明王

院別当として鎌倉真言派を支えていた。

良瑜の付法の弟子は一三名いる。在京時代に公寛・九条道家・厳盛・聖寛の四名、鎌倉に戻ってから印勝・朝瑜・頼乗・元瑜・道宝・厳章・聖瑜・範乗・頼守（頼助）の九名に伝法灌頂をさずけている。このうち頼助大僧正は鎌倉真言派の中心人物として鶴岡八幡宮別当・東寺長者・東大寺別当を歴任したし、公寛も佐々目法華堂別当に任じられた。鶴岡八幡宮供僧となった頼乗・元瑜は権僧正にまで昇任し、聖瑜は鶴岡大仁王会講師をつとめたほか、祈禱面でも活躍した。勸修寺道宝大僧正は鎌倉で授法活動をおこなったし、金剛王院範乗も祈禱や授法を鎌倉で展開し、厳盛・聖寛・印勝・朝瑜も鎌倉で活動している。九条道家と事蹟の不明な厳章を除けば、良瑜の弟子はいずれも鎌倉での活動実績がある。道慶によって將軍護持体制から排除されたこと、このことが逆に良瑜を復活させ、鎌倉に安祥寺流を展開させる要因になったのである。

二 鎌倉での伝法灌頂

次に、鎌倉で伝法灌頂をおこなった主要な僧侶をとりあげたい。密教では伝法灌頂によって後継者を育成するが、鎌倉寺門派の場合は、師資ともに鎌倉に居住していても、伝法灌頂は必ず京都で行っており、鎌倉で伝法灌頂をさずけることは一度もなかった。²⁰⁾ 鎌倉真言派でも当初は師資ともに上洛して伝法灌頂を行っていたが、鎌倉中期から鎌倉実施に変化している。これは密教僧の再生産が東国で完結することを意味し、東国仏教自立の一指標となる。そこで本章では鎌倉での伝法灌頂を主導した二人の僧侶の事蹟を検討したい。三宝院流光宝方の光宝と、金剛王院流実賢である。

まず光宝法印権大僧都（一一七七～一二三九）は、勸修寺流の中納言藤原光雅の子であり、承久の乱で処刑された按察使中納言光親の弟に当たる。公名は左衛門督または按察使で、鳥羽法印・平等心院法印と称された。一族の勸修寺成宝の弟子となり建仁元年（一二〇一）に伝法灌頂をうけた。師の成宝正僧正（一一五九～一二二七）は勸修寺雅宝の入室灌頂の弟子であるが、他方では三会講師・三講證義もつとめた顕密併修の僧侶である。勸修寺長吏や元興寺・法隆寺・大安寺・東大寺別当、東寺一長者を歴任している。

光宝の初見は、建久四年（一一九三）仁和寺御室守覚から道尊への伝法灌頂での威儀僧としての出仕である。翌年の仁和寺結縁灌頂の小阿闍梨をつとめて已灌頂となり、建仁三年には勸修寺興然からも重受した。建永元年（一二〇六）に成宝の勸賞の譲りで法眼に叙され、承元三年（一二〇九）成宝の後七日御修法には伴僧として出仕して、八宗奏を行っている。³⁰ その後も成宝の側近として活動し、建暦三年（一二一三）には少僧都となっているが、それから間もなく成宝のもとを去ったようで、このあと事蹟が三年近く空白となる。『密宗血脈鈔』『野沢大血脈』によれば、成宝が秘密大事を教授しようとしないうのを恨んで離反したという。それがどこまで事実かは定かでないが、建暦三年八月に成宝は請雨經法を修している。この修法で成宝は勸賞を得たが、勸賞の具体的内容は明らかではない。³¹ このころ成宝の最も主要な側近は光宝と兼成であり、二人ともこの時に伴僧をつとめたが、光宝・兼成ともにこの伴僧勤仕を最後に成宝のもとを離脱している。このころに彼らと成宝との間で確執が生じたのであろう。

やがて光宝は醍醐寺成賢の弟子となった。成賢遍智院僧正（一一六二～一二三二）は藤原信西の孫にあたり、中納言成範の子であり、三宝院成賢流の祖である。叔父の三宝院勝賢から伝法灌頂をうけ、醍醐寺座主・東寺長者を歴任した。成賢と光宝との直接的な接点は、承元四年（一二一〇）成賢の東寺長者拝堂の折りに光宝が導師をつと

めたのが最初である。建保五年（一二一七）六月には成賢の勸賞で光宝が大僧都に任じられ、同年十二月に成賢から重受し、さらに翌年九月には成賢から醍醐寺座主を譲られている。その後も成賢の側近として扈從したが、単独でも修法を行うようになり、建保六年二月には金輪法を、同年八月には後鳥羽院不予の五壇法脇壇を勤仕した。⁽³²⁾

ところが兄の中納言光親が北条義時追討の院宣の奉者であったこともあり、承久三年（一二二一）六月に幕府軍が入京すると、光宝は醍醐寺座主を辞して三宝院を退去した。その後、法琳寺別当への就任をめざし、すぐには叶わなかったが、成賢の支援もあつて別当に補され貞応三年（一二二四）の太元帥法を勤仕している。安貞二年（一二二八）三月には成賢の挙で醍醐寺座主に還補され、五月には祈雨御読経の勸賞で醍醐寺清瀧宮に阿闍梨三口を、さらに阿弥陀院にも阿闍梨三口を朝廷から寄せられた。ところが成賢との不和が表面化し、醍醐寺衆徒との対立もあつて寛喜元年（一二二九）五月、光宝は醍醐寺座主の辞任に追いこまれる。寛喜三年九月に成賢が没しているが、光宝は葬儀にも参列していない。義絶されたとみてよい。光宝は京都南郊の鳥羽に移つて授法活動をしているが、展望のみえない光宝はやがて定豪の弟子となつて鎌倉に下向した。⁽³³⁾

良瑜の項でも述べたように、当時、定豪は主に京都で活動しており、東南院定親・安祥寺良瑜らを鎌倉に招聘していた。光宝の鎌倉行きは貞永元年（一二三二）から天福二年（一二三四）の間のことであるので、光宝の下向も將軍頼経―定豪による人的整備の一貫として捉えることができる。光宝と定豪との接点を考えるうえで重要なのが、定憲への伝法灌頂である。定憲権少僧都（二一九〇―一二五九）は定豪の入室灌頂の弟子で、鶴岡八幡宮供僧であつた。嘉禄二年（一二二六）定豪が修した後七日御修法の伴僧をつとめたのをはじめ、定豪の側近として活動していた。その定憲が時期は不明ながら、京都の「新熊野」で光宝から伝法灌頂をうけている。⁽³⁴⁾この新熊野社は承久の乱

後に定豪が檢校職に補任されたもので、死没するまで檢校職を保持していた。「新熊野」での伝法灌頂は定豪と光宝との提携を象徴するものとして実現した。

鎌倉での光宝は幕府祈禱や將軍護持に尽くした。文暦二年（一二三五）六月の五大堂（明王院）供養では、職衆二二口のトップに名を連ねているし、翌年九月の彗星祈禱では定豪・快雅（山門）らとともに七壇北斗護摩を修した。天福二年の竹御所の御産では五壇法の中壇や脇壇をつとめ、嘉禎元年の將軍賴經病悩に際しては仏眼護摩や十一面護摩を勤仕した。また將軍御所で行われた涅槃經論議にも出仕しており、知法の僧として活躍した。特に竹御所の御産祈禱では、定豪と光宝が五壇法中壇を交代してつとめており、この時期の光宝が鎌倉真言派において定豪に次ぐ地位にあったことを示している³⁵。

鎌倉における光宝の最大の功績は伝法灌頂の実施である。幕府僧による伝法灌頂は定豪から始まるが、灌頂の場所はいくまで京都であった。それに対し光宝は初めて鎌倉で伝法灌頂を実施した。『血脉類集記』によれば、時期は不明ながら、鎌倉の若宮坊・胡桃谷・明王院で守海・親玄・祐親（定弁）・良全・縁長・尊恵・覚長（長全）の七名に伝法灌頂を行っている。一方、『醍醐本血脉』は光宝の付法として、嚴盛・淨尊・賢寛・道教・定憲・兼成・榮然・宗禪・祐親（定弁）・有承・賢宝・守海・尊恵・仁宝・良全・円長・覚長（長全）の計一七名を挙げているので、鎌倉での授法はさらに増えるはずである。³⁶ 鎌倉における光宝の初見記事は天福二年（一二三四）七月であり、延応元年（一二三九）四月に死没している。光宝の伝法灌頂はその間に実施されたことになる。このうち守海法印権大僧都は佐々目遺身院別当であり頼助大僧正をはじめ数多くの弟子を残したし、祐親法印は雪下新宮別当となり北条貞時護持僧として活躍した。兼成法印は明王院供僧であつたし、定憲権少僧都は鶴岡供僧に任じられ、嚴

盛法印権大僧都・良全法印・仁宝律師・覚長（長全）阿闍梨も鎌倉で活動している。

鎌倉での光宝の所職は判然としないが、明王院別当であった可能性が高い。伝法灌頂を行った場所に着目すると、「鎌倉若宮坊」が三度、明王院が二度である。³⁷前者は鶴岡八幡宮の本主であった定豪の配慮によって、別当定親の住坊を借用したのであろう。明王院は文暦二年（一二三五）六月に將軍頼經の御願として建立され、定豪が初代の別当となった。その定豪は東寺一長者に就任したため翌年十二月に上洛し、嘉禎四年（一二三八）九月に八七歳の高齢で京都で亡くなっている。³⁸明王院別当次第が伝わっていないため、断片的史料から別当を復元してゆくしかないが、定豪に次ぐ光宝の地位、および定豪と光宝との関係からして、上洛する定豪が明王院別当職を光宝に譲って後事を託したのではあるまいか。しかもこの時期、明王院で活動した記事がみえるのは光宝だけである。その点からして、光宝は定豪から明王院別当職を譲られたと考えてよい。

光宝に次いで鎌倉で伝法灌頂を行ったのは随心院嚴瑜であるが、紙数の関係で別稿に譲ることとし、次に実賢をとりあげたい。実賢大僧正（一二七六―一二四九）は修理権大夫藤原頼輔の孫、右馬権頭基輔の子である。母は源盛経女で、公名は大夫、金剛王院僧正と号した。建久七年（一一九六）に醍醐寺勝賢から伝法灌頂をうけたが、翌月、勝賢が亡くなったため、金剛王院賢海の弟子となり正治二年（一二〇〇）に重受した。しかし賢海の政治力の弱さなどもあって「貧道無縁」の前半生を送っており、権律師に任じられたのは嘉禄二年（一二二六）五一歳になってからであった。寛喜二年（一二三〇）に権少僧都、貞永元年（一二三二）には賢海の勸賞の譲りで法印に叙せられた。天福元年（一二三三）には御室道深の十壇愛染王護摩脇壇に出仕したのをはじめ、藻壁門院御産祈禱で転法輪法を修したし、その後も盛んに五壇法脇壇をつとめたりした。嘉禎二年（一二三六）賢海の譲りによって醍醐寺

座主となり、翌年賢海が亡くなると醍醐金剛王院・蓮華院を相承した。嘉禎四年には権僧正、仁治元年（一二四〇）には請雨経法を修して験を施し、東寺長者に加任された。その後も仁治二年、寛元二年（一二四四）と祈雨祈禱で活躍している。また仁治二年の後七日御修法を勤仕し、寛元三年五月には後嵯峨天皇の正護持僧となった。同年十二月に醍醐座主を弟子の勝尊に譲ったが、自らは検校として醍醐寺の実権を握り続けた。寛元四年正月に後嵯峨が退位して院政をひらくと、実賢は院護持僧として廻祈禱を担当している。宝治元年（一二四七）四月に後深草天皇の正護持僧、同年十二月に東寺二長者に還補され、翌年閏十二月に一長者となった。醍醐寺僧が東寺一長者となるのは、定海以来、百年ぶりのことである。建長元年（一二四九）後七日御修法を勤仕し、六月には普賢延命法で後深草天皇を平癒させて大僧正に任じられ、九月に七四歳で死没している。不遇な前半生と、六〇歳以降の急激な昇進³⁹が印象的である。

幕府との関係では、嘉禎四年（一二三八）上洛した將軍頼経のために六波羅邸で道慶・成嚴らと五壇法を修したし、仁治三年には少なくとも五月から翌年二月ごろまで鎌倉で活動している。『血脈類集記』『醍醐本血脈』や聖教奥書をもとに鎌倉滞在中の実賢の活動を復元すると、仁治三年五月に大倉の大門寺灌頂堂で定清に伝法灌頂をさずけた。この時は略儀であったが、七月には定撰・賢淳・阿鐙に、九月には定宝に、十月には範乗に伝法灌頂を行ったほか、良全・定宗にも実施している。⁴⁰このうち定清権僧正は大門寺別当となり、定撰律師・定宝法印権大僧都・範乘法印・良全法印・定宗法印権大僧都も鎌倉で活動した人物である。残念ながら、実賢の活動の全容を明らかにすることはできないが、実はほぼ同時期に上乘院良恵も鎌倉に滞在していた。良恵大僧正（一一九二～一二六八）は九条兼実の子であり、東大寺別当をへて仁治元年（一二四〇）に東寺一長者に補任され、その後も一長者に二度

還補された東密の重鎮である。実賢の伯母が九条兼実と結婚しているので、実賢と良恵は義理の従兄弟の関係にある。詳しい考証は別稿に譲るが、その良恵が仁治三年の後半から翌年初めまで鎌倉に滞在して祈禱活動を行っており、実賢の滞在時期とほぼ重なる。つまり実賢・良恵という当代きつての東密の巨匠がほぼ同時期に鎌倉を訪れていたのである。『吾妻鏡』は仁治三年条が欠けているうえ、翌年四月まで僧侶の祈禱記事がみえないので、二人の活動実態や来訪目的を明かすことができない。將軍頼經による人的整備の一貫とも考えられるが、それにしては突出した重鎮であり滞在期間も短い。留意すべきは仁治三年五月に北条泰時が病悩で出家し、六月に死没している。死没の前後には後鳥羽院の怨霊が跳梁したという。幕府は泰時治病のため医師派遣を京都に求めているので、実賢・良恵の鎌倉下向が北条泰時の病悩祈禱を目的としていた可能性も十分にある。

鎌倉滞在中で実賢は幕府要人との関わりを深めただろう。ちなみに『密宗血脈鈔』によれば、有力御家人安達景盛が出家して受法を望んだところ、菩提院行遍は拒絶したが、実賢はそれを許したので、景盛は実賢を大僧正・一長者にするために奔走したという。事実、『醍醐本血脈』には実賢の付法に覚智（安達景盛）の名がみえるし、『東宝記』は「実賢・行遍相論、及都鄙沙汰」と述べていて、東寺一長者をめぐる二人の争いが幕府を巻き込んでいる。⁴⁷しかし安達景盛は宝治二年（一二四八）五月に亡くなっており、実賢の一長者・大僧正就任はそれから八ヶ月後および一年二ヶ月後のことであるため、先の話をは鵜呑みにはできない。実賢が醍醐寺僧として百年ぶりに東寺一長者に就任できた背景には、さらに深い政治的葛藤が潜んでいたはずである。

寛元年間に鎌倉幕府では、將軍九条頼經と北条得宗との対立が激化した。やがてそれは京都政界をも巻き込み、九条頼經―名越氏―三浦氏―九条道家と、北条時頼―安達氏―二条良実―西園寺実氏の対抗関係が顕在化し、宮騒

動・宝治合戦を経て後者が勝利をおさめた。こうした激動のなかで実賢はどのように身を処したのであろうか。九条道家は朝廷の権勢者であり遠縁でもあったので、実賢は道家の要請で、『瑜伽經口決』を講じたり九条忠家の病悩祈禱を行ったりしている⁽⁴³⁾。しかし、実賢がより近い関係にあったのは二条良実・西園寺実氏であった。実賢は良実の「御祈僧」として「夢想」の相談にあずかっていたし、西園寺実氏についても寛元四年（一二四六）五月からその要請で百箇日不断宝篋印陀羅尼を修しており、その結願から間もなく西園寺実氏は九条道家に代わって関東申次に任じられた。しかも宝治元年七月九日の醍醐寺憲深の言によれば、「実賢僧正、法性寺殿下御気色不_レ宜」と道家が実賢に不快感を示していたという。また、実賢が仁和寺御室道深に対し「関東事出来テ、無_二為泰村等滅亡_一、併我験也」と豪語したともいう⁽⁴⁴⁾。実賢は宝治元年六月五日の三浦一族の滅亡を自分の法験とみなしていた。実賢が醍醐寺僧として百年ぶりに東寺一長者に就任できたのは、その効験に対する朝幕の配慮である。『密宗血脈鈔』のいうように、安達景盛の受法をめぐる確執が実賢を東寺一長者にしたのではない。宝治合戦での祈禱が実賢を東密の頂点に押し上げた。隆弁と同様、京都・鎌倉を巻き込んだの権力闘争が実賢の運命を大きく変えたのである。

おわりに

以上、鎌倉真言派三名の事蹟をたどってきた。最後に主な論点をまとめておく。①安祥寺流の本格的発展は良瑜の鎌倉下向に始まり、鎌倉安祥寺流と京都安祥寺流は互いに協力しながら顕密仏教界での地位を向上させた。②良瑜・光宝とも、その鎌倉行きには定豪が深く関与しており、彼らの鎌倉下向は將軍―定豪によって推進された鎌倉仏教界の人的充実策に込めるものであった。③道慶の登場によって良瑜が將軍護持体制から押しだされたことが、

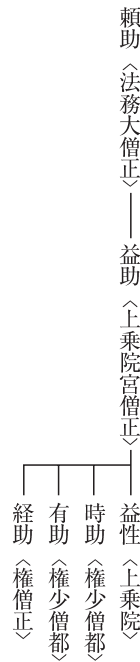
宝治合戦後の良瑜の復活と鎌倉安祥寺流の展開を可能にした。④光宝・嚴瑜・実賢らは鎌倉で初めて伝法灌頂を行い、これにより鎌倉真言派は密教僧の再生産を自立的に行うことが可能となった。⑤実賢は醍醐寺出身僧として百年ぶりに東寺一長者に補任されたが、その背景には宝治合戦での三浦氏調伏祈禱があった。

本稿では三名の僧侶について検討した。今後、事蹟を明らかにしなければならない鎌倉真言派の僧侶はなお一〇〇名を越える。道は遠いが着実に研究を積み重ねてゆきたい。

注

- (1) 平雅行「定豪と鎌倉幕府」(『古代中世の社会と国家』清文堂、一九九八年、以下、A論文と略称)、同「鎌倉山門派の成立と展開」(『大阪大学大学院文学研究科紀要』四〇、二〇〇〇年、以下、B論文と略称)、同「鎌倉幕府の將軍祈禱に関する一史料」(『同』四七、二〇〇七年、以下、C論文と略称)、同「鎌倉寺門派の成立と展開」(『同』四九、二〇〇九年、以下、D論文と略称)、同「鎌倉における顕密仏教の展開」(『日本仏教の形成と展開』法蔵館、二〇〇二年)
- (2) 櫛田良洪『真言密教成立過程の研究』(山喜房仏書林、一九六四年) 第二編第六章、橋本初子「関東と密教僧」(『三浦古文化』五五、一九九四年)
- (3) 藤原良輔については没年条(『大日本史料』四一・四一八三頁)、多賀宗隼「兼実とその周囲」(同『玉葉索引』吉川弘文館、一九七四年)、八条院についてはとりあえず石井進「源平争乱期の八条院周辺」(同編『中世の人と政治』吉川弘文館、一九八八年)を参照。
- (4) 『血脈類集記』(『真言宗全書』三九一二二頁・二四九頁)
- (5) 『血脈類集記』(『真言宗全書』三九一七七頁・二二二頁)、『大日本史料』五一八一九一頁、五一九一〇頁・八五五頁、五一〇一三七九頁、五一一一八〇六頁・九一八頁
- (6) 『血脈鈔・野』(『統真言宗全書』二五一九一頁)。なお、本書は関東安祥寺流の相承を「良瑜被讓与頼助僧了了、頼助下

成助、慈助、有助四代相統」と述べる。ところが「成助」「慈助」なる真言僧は当時の鎌倉で確認できない。このうち「成助」は頼助の弟子で鶴岡八幡宮別当でもあった政助であろう。一方「慈助」については北条時村の孫で、為時の子に「時助」〈権少僧都、佐々目〉がいる。金沢文庫蔵「御正流尊法奥書」によれば



とある（『図録仁和寺御流の聖教』一三頁、神奈川県立金沢文庫）。仁和寺御流が北条出身の時助・有助に伝えられたことを示すが、この史料からして安祥寺流も時助・有助に伝法されたとみてよい。時助・有助に関しては前掲注（一）拙稿B論文を参照。

- (7) 『血脈鈔・野』（『続真言宗全書』二五―九五頁）、「文永六年七月日」観俊讓状案（『鎌倉遺文』一〇四六六号）、「永仁四年二月二十三日」頼助讓状案（『同』一九〇〇四号）
- (8) 櫛田良洪注（二）前掲書五一―五頁。吉田通子氏も論文「鎌倉後期の鶴岡別当頼助について」でほぼ同内容の記述をしている（『史学』五四―四、一九八五年、三七頁）。
- (9) 安祥寺流歴代については、醍醐寺本『伝法灌頂師資相承血脈』（『醍醐寺文化財研究所研究紀要』一、以下、本史料を『醍醐本血脈』と略称）九六頁を参照。なお、良伊の代に鎌倉幕府が亡んだ。隆雅は後醍醐天皇の繪旨で安祥寺流の自専を果たしたが、その後も南朝に従ったため、隆雅の「自専管領」は実際には有名無実であった。
- (10) 『玉葉』治承五年六月二十七日条。また、元暦元年九月二十三日条、および岡田三津子『平家物語』の虚構」（『文学史研究』二五、一九八四年）を参照。
- (11) 「大元法理性院相承次第」によれば、成嚴から後は「為妨余人競望、師資存日讓与別当職」することによって太元阿闍梨を独占したという（『大日本史料』六―四七―三四五頁。各年度の太元阿闍梨は『大日本史料』『続史愚抄』正月八日条を参照）。
- (12) 『大日本史料』五一六―一八七頁・二五七頁

- (13) 『吾妻鏡』 貞永元年十月十七日条。定豪については前掲注(1)拙稿A論文を参照。
- (14) 『大日本史料』 五一―一九五〇頁、『門葉記』 一二二(『大正新脩大藏經 図像部』 一一―二三六頁)、『吾妻鏡』 貞永元年五月十八日条
- (15) 『吾妻鏡』 貞永元年十月十四日条、延応二年正月十七日条、同年六月十六日条、嘉禎三年六月二十二日条
- (16) 『明月記』 天福二年八月二十六日条、『吾妻鏡』 延応元年五月十一日条。本稿では『明月記』 天福二年九月六日条「安祥寺法印」、および『明月記』 天福二年八月二十六日条「安祥寺律師(如法愛染堂主)」をいずれも良瑜と判断した。前者は定豪僧正の付属変改を愁嘆して「安祥寺法印」が伊豆に逐電した記事であり、『大日本史料』はこの人物を成嚴に比定するが(『大日本史料』 五一―九一六〇〇頁)、従いがたい。第一に『血脈類集記』は良瑜を「忍辱山大僧正定豪弟子」とするが、成嚴と定豪との師弟関係がうかがわせる記事は確認できない。第二に成嚴は当時七四歳である。八三歳の定豪よりも年下とはいえ、定豪の付属を受けるには高齢すぎる。第三に良瑜は当時法印であったが、成嚴が法印に叙されるのは五年後の嘉禎四年七月である(『大日本史料』 五一―九一八頁)。以上から、ここに登場する「安祥寺法印」を良瑜と考えた。
- 問題は後者の「安祥寺律師(如法愛染堂主)」である。僧官位からするとこれは成嚴ということになる。しかし、成嚴は一貫して京都で活動しており、鎌倉での活動記事はこれ以外にはみえない。竹御所の御産祈禱が重要であるにしても、この祈禱のためだけに七四歳の成嚴が鎌倉にやってくるとは考えにくい。一方、良瑜はその前後の時期に鎌倉で盛んに祈禱に従事している。しかも成嚴が如法愛染法を修した記事はみえないが、良瑜の場合は「良瑜僧正(安祥寺)於関東修之云々」とあるほか(高橋悠介「随心院藏『如法愛染王勤例』翻刻」『随心院聖教と寺院ネットワーク』三、二〇〇七年)、『血脈記』にも「於関東行如法愛染事、安祥寺良瑜是初也」とあり(『続真言宗全書』二五―一三三頁)、時期は不明ながら良瑜は鎌倉で如法愛染法を勤修している。これらの点から、僧官位に齟齬があるものの、ここにみえる「安祥寺律師(如法愛染堂主)」は成嚴ではなく、良瑜のことであると判断した。
- (17) 『吾妻鏡』 延応二年六月二日条・九日条・十六日条
- (18) 『大日本史料』 五一―九一五九九頁、前掲注(1)拙稿A論文
- (19) 『吾妻鏡』 嘉禎三年六月二十二日条に「權僧正」とみえる。

- (20) 『血脈類集記』(『真言宗全書』三九一二四九頁)、櫛田良洪注(2)前掲書六五七頁、前掲注(1)拙稿C論文
- (21) 「永福寺別当次第」(実相院文書二六箱一二六号)、『大日本史料』五一・一三・一六六五頁
- (22) 『大日本史料』五一・二〇・一二三頁、『血脈類集記』(『真言宗全書』三九一二四九頁)
- (23) 道慶については、前掲注(1)拙稿D論文を参照。
- (24) 『西院血脈』(『統真言宗全書』二五・一二六頁)。建長五年段階に良瑤が鎌倉にいた可能性もあるが、その場合は元瑤は宏教ではなく良瑤のもとで修学するはずである。
- (25) 『血脈類集記』(『真言宗全書』三九一二五〇頁)、『吾妻鏡』文応元年六月五日条、文永三年正月十二日条、文応元年八月八日条、弘長三年十二月十一日条、文永二年九月二十一日条、『弘安四年異国御祈禱記』(『続群書類従』二六上・一八六頁)
- (26) 『吾妻鏡』正嘉元年八月二十一日条、正嘉二年五月五日条。大阿闍梨は候補者から圖で決せられた。
- (27) 『吾妻鏡』弘長元年二月二十日条
- (28) 『血脈類集記』(『真言宗全書』三九一二五〇頁)、『西院血脈』(『統真言宗全書』二五・一二六頁)
- (29) 前掲注(1)拙稿D論文。なお、鎌倉山門派については史料が欠けていて伝法灌頂の場所を特定することができない。
- (30) 『血脈類集記』(『真言宗全書』三九・一六六頁・一八〇頁・二二三頁)、『尊卑分脈』二・一〇七頁、『醍醐寺新要録』九二三頁、『大日本史料』四・九・二五三頁、四・一〇・一五〇三頁、五・一・二四〇五頁。また橋本初子注(2)前掲論文を参照。
- (31) 『野沢大血脈』(『統真言宗全書』二五・一二二頁)、『密宗血脈鈔』(『同』二五・一三三八頁)、『大日本史料』四・一二・一六四八頁、『建曆請雨記』(国立歴史民俗博物館蔵、田中穰氏旧蔵典籍古文书四四四号)、『請雨経法記』(同・一二二号)。左大臣法印兼成については別稿を用意している。
- (32) 『大日本史料』四・一四・三九二頁・五八一頁・七六八頁、四・一五・一五五頁・一八七頁、『東寺長者補任』(『続々群書類従』二・五七二頁)
- (33) 『大日本史料』四・一六・三九四頁、五・一・一三五頁、五・二・一二五頁、五・四・五四四頁・六〇五頁、五・五・一二九頁、五・六・一七八二頁、五・一・二・四一一頁、『貞応二年十一月四日』成賢書状案(『鎌倉遺文』三一七二号)、『血

- 脈類集記』(『真言宗全書』三九一二三頁)、『醍醐本血脈』五〇頁
- (34) 『血脈類集記』(『真言宗全書』三九一二三頁・二五四頁)、『鶴岡八幡宮寺諸職次第』(鶴岡叢書四一八〇頁・二三二頁・二八〇頁)、『大日本史料』五一三一・二五頁
- (35) 『吾妻鏡』文暦二年六月二十九日条、嘉禎二年九月十三日条、嘉禎元年十二月二十二日条・二十六日条、文暦二年二月十五日条、『大日本史料』五一九・五九三頁
- (36) 『血脈類集記』(『真言宗全書』三九一二三頁)、『醍醐本血脈』五〇頁
- (37) そのほか光宝は二人の伝法灌頂を『鎌倉胡桃谷』で行っている(『血脈類集記』)。胡桃ヶ谷は後に大楽寺が造立された地であるが、鎌倉中期における実態は不明である。
- (38) 『吾妻鏡』文暦二年六月二十九日条、『大日本史料』五一・一九五〇頁
- (39) 『血脈類集記』(『真言宗全書』三九一七六頁・二三六頁)、『野沢大血脈』(『統真言宗全書』二五一五一頁)、『尊卑分脈』二・三八二頁、『葉黄記』寛元四年閏四月一日条、『大日本史料』五一九・一四一頁、五一・二一八八七頁、五一・一三・五八一頁、五一・一七・三八八頁、五一・一九・一八四頁、五一・二七・四〇二頁、五一・二九・一一頁、五一・三〇・三九九頁、五一・三一・二二二頁
- (40) 『大日本史料』五一・一八〇六頁。『醍醐本血脈』四九頁での実賢の付法が伝法灌頂の年次順に並んでいること、および仁治四年正月・二月に実賢が良全に『三宝院伝法灌頂私記』の書写を許していることから、良全・定宗の灌頂が鎌倉で行われたと判断した。『血脈類集記』(『真言宗全書』三九一二三六頁)、『神奈川県史資料編』中世二四二号、二四三号、三五七・三六一号、一三六〇号。
- (41) 『平戸記』仁治三年五月三十日条、『大日本史料』五一・四一三七三頁・三九九頁
- (42) 『密宗血脈鈔』(『統真言宗全書』二五・一三三七頁)、『醍醐本血脈』四八頁、『東宝記』(『統々群書類従』一二・一三三頁)
- (43) 『大日本史料』五一・二〇・二八三頁、五一・三一・二四九頁
- (44) 『平戸記』寛元二年二月二十日条、『大日本史料』五一・二一・一三三九頁、『報物集』(『醍醐寺文化財研究所 研究紀要』一四、林文字翻刻、一九九四年、一七九頁)

SUMMARY

The priests of the Shingon Buddhism in Kamakura

TAIRA Masayuki

In this study, I clarified the biography of three priests of the Shingon Buddhism who were active in Kamakura. I was going to clarify the religion policy of the Kamakura Shogunate and the historic change through this fundamental work.

Following the criticism by SASAKI Kaoru, the religious policy of the Kamakura shogunate has become a point of argument which decides the success or failure of the Exoteric-esoteric theory (顕密体制論). As the Exoteric-esoteric theory attached too much importance to the influence of the temple-shrine power complexes in the Kyoto area, it has tended to disregard the Buddhist community in Kamakura and East Japan. In order to reconstruct the Exoteric-esoteric theory, it is necessary to elucidate the religious policy of the Kamakura government in a concrete way. However, there are not many historical materials, and it is not easy to elucidate it. Therefore I thought to press the problem by clarifying the career of the priest who was active in Kamakura.

I examined three priests of the Shingon Buddhism in this article till now because I studied priests of the Sanmom School and the Jimon School. The three priests are Ryoyu (良瑜), Koho (光宝) and Jikken (実賢). As a result of examination, I was able to clarify the following facts.

(1)The Anjoji School (安祥寺流) of the Shingon Buddhism developed in earnest since Ryoyu came to be active in Kamakura. And the Anjoji School in Kamakura and the Anjoji School in Kyoto cooperated and made an effort toward their status improvement in the Buddhist community.

(2)When Dokei (道慶) came to play an active part in Kamakura, Ryoyu came to be removed by the system which protected the shogunate for prayer, and there was no help for it, Ryoyu returned to Kyoto. However, thanks to the grace, he was able to reopen activity in Kamakura after the Hoji-kassen (宝治合戦).

(3)Koho and Jikken held the ceremony of Buddhistische Taufe (伝法灌頂) for the first time in Kamakura. The Shingon Buddhism in Kamakura got possible to perform the reproduction of the priest of the esoteric Buddhism by the enforcement of this ceremony autonomously.

(4)Jikken was appointed as a priest from Daigo-ji Temple after an interval of 100 years by the Director General of the Shingon Buddhism. Such; the reason why a rare thing was realized is that he prayed for Hojo-Tokuso (北条得宗) at the time of the Hoji-kassen.

キーワード：鎌倉幕府，北条得宗，鎌倉真言派，伝法灌頂，安祥寺流